源氏物語系圖

大上天皇

[illegible]

[illegible]

前坊

故院のたてまつりかたと養ようしうち

秋好中宮　母ハ六条の息所

[illegible]

[illegible]

[illegible]

桃園式部卿宮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

南田氏藏書

出家せられ、ワさ付檀

主宮　院政の御方より行

[illegible]

母文　祇園文より行

僧の巻より

朱雀院　ワさ付朱

母ハ弘徽殿大御

桐壺巻より[illegible]文初

[illegible]より位をも文より

西山の寺より行せ給ひ同巻に栄花物語に一院と申せ

今上　母兼家女御

御巻より二歳とうまれより[illegible]文初後

より元服若菜下より位より[illegible]ワさ付今上

母一文　[illegible]より

藤葉文　母ハ一条の摂政の御方より行後

[illegible]下より御本書の御方より行後

[illegible]大[illegible]

上京の親王　母ハ先帝の御[illegible]文

[illegible]より山桜[illegible]より[illegible]京に行

御本の巻より[illegible]行　ワさ付[illegible]

母四宮　[illegible]より

春宮　母ハ[illegible]文

[illegible]より[illegible]行て同下より[illegible]行

武戸宮　母ハ吉文よりおすぐ
白文の文巻ニ夕書れ中ゑとえて六条院れ
寝殿と体と所ニ行工の文と書き時ハ武戸
白吉宮文　母ハ同上
下ハ下ニ行れ白文巻ニ元服して吉宮ニ
任ぜ紫上ニ面ニうつい行ニ三れ文ニうつ白
若ゑ　母ハ宇治れ中ゑ
やうれ巻ニ生れ行
常陸宮　母ハ更衣
白文れ巻ニ夕書れ大ゐのうちれ内ゆうぐ
行ニ日吉宮文ニ白ひとれしく母の文と書

中務宮　母ハ同吉文
おすぐさのうちれ日夕書れ大ゐうひさうして東ニ
れ行ニ文の文乗ニ文れ伝の時ニ行ぐ
ゆ文ニ上野のみこと殿ニおうい行しく
一宮文　母ハ同吉文
うれも紫一面ニうい行て六条院の南れ所ニ
ゆまれ行ゆ文ゐ心ゆうしく
女二文　母ハ変ぐの女御
面ニうゆニ内れさうして葉と舞ニうい行
六条院　母ハ三ゆうぐの更衣
七歳ニて源の姓ニ行ニ十二ニて元服ゆ

中納言藤原実房より正三位（中納言如元）同卷に宰相（中納言如元）藤原大納
言（中納言如元）より浦より出て行て被仰
の權大納言より澤潟より内大臣（藤原）より沖信
そひて牛車の宣旨をうけ給はり毎に太政大臣被
仰下葉に大上天皇（後鳥羽）の御所をえ給はり御所
夕霧左大臣　母ハ藤原
澤潟より内大臣（藤原）より帰殿（ゴ）に元服して御さきを
うけたまはり同卷に秋除目にうけ給はり朱雀院行幸に
時侍従にうけ給はり中納言（中納言如元）藤原実房より宰相（中納言如元）藤原実房
より權中納言（中納言如元）藤原実上に右大将同下に大納言（大納言如元）として左大将
より拾遺（ジヲ）に白文卷に右大臣（大納言如元）竹川に左大臣（大納言如元）辞（ジヲ）大将

薫（カホル）右大将　母ハ女三宮
初に卷に生れ給ひ白文の卷に元服をして四位侍従
と云ひ其の秋右近中将（中将如元）同卷に三位をして宰相（中将如元）
竹川に中納言（中納言如元）中将より被二月かけ給ひ竹大納言
にて右大将と為ぞ
明石中宮　母　明石上
三月に生れ給ひ浦にて生れ給ひ根風に乗て
のぼりて大納言に位給ひ雲に乗て上給ひ人に
後裏葉に雲文（雲にて上給ひ人に）
中文白文卷に白文大給文

右書つ書　冊　三条上

仰せ下し宋朝院に奏れ給ひて時日をもとめて年
ごと毋ぶの要樹給ひとうも白文の巻よりはつ
の日お仕ひ人人又白文中文宗法をもて和歌
新しく日中文の仰つひてまうでらるし。仰
げすさよう。

中納言　冊　参内は
六条院夜のれくじうて剛ないれ沙ぶ宋朝
院に奏れ給ひ給ひ給ひ尚日見参と同しく年
新ふ。仰下し給ひ白文巻よりのうれは
右書つ書とおすぐくお仕ひ人人

右大辯　冊　三条上

白文の巻よりのうれはお仕ひ人雅ぶ下し
宗法へ年ぶらるし。巻業下に三条と云り
侍従宰相　冊　雅ぶ
ぶ下くよ白文のうれひまうでれ宗法へ
年ぶうしし人人

源宰相中将　冊　三条上

もしい義人者行沙ぶ三位中将同巻よ宰相
中将ぶ下くる雅中納言と云て又約の巻
よりの雅そ雅ぶ殿ぶ一沙ぶ云ふ
ぶ人ぶうや

頭中将　母女房付

竹河より源かおるとゝのゝ中将の白文先に
ようゝひ初江ひ〻対文なくの使して行幸を
てし侍へしく稚ぎ木より次中おるとゝのゝ人〻見へ

四位少将　母三条上

一本文れうやうに対橋ハ信教のかゝへ中文れ仕使を
しく竹ハより名高侍ぎ木より義人名高侍と云り

童　母うしなし

やうきよ今上れ女二文女れ文へ〻江〻対笛吹
うゝしく七郎君とあり

春宮女御　母三条上

白文の巻ゝ春宮へ参り江

中将　母三条上

二文れ小のうゝ

三ノ君　母女房付

四ノ君　母三条上

五ノ君　母かゝ

六ノ君　母女房付

いと三人名きり巻ゝようゝ

やうきよ白文の小ゝようゝ江

紫式部日記

とし八帥文上母より朱雀院の行幸れ対参り

とうの中将つるよりも梅よりも
侍従　母もとの小れうに
梅の枝よりも桜院の父の殿ぼんてれば
うりいでしへ
童
同
はこ二人ひかれ下る朱雀院の殿のたぐよりも
嚴樂ようい沢
宮内方　母まもとうの上
父うせおはて後母きよりて梅壺の内侍なる
よ位沢の中将ぞうづよ沢しへ

中宮　母兵香殿女御
五葉し殿より童うして秋風乗まい沢しへ
帥宮
紫よりい桜院の馬場のおそ兄の中将
けうひとりて見沢しへ
八宮　母大臣女
宇治よりつり沢の橋姫の巻ようしうらうで
たくの文くりさ行へ
総角大君　母大臣女　総角巻ようも沢りさ行木
中君　母おな
ものがたりよ巻ようもよりて宇治よ

二条院へいらせられ給ひしとき

落飾　母はゝ　ちが今の北方

やうやうまことにひらかるゝのゝちて京にまゐ給ふ

うつり給ふ宮は小野にまうで給ふとき

式部卿宮

ものしやはべりけるとこそ

しらべ　帖帖は失給へるつゐでに

侍従　母もとの北方

宮の君　母おなじ

父宮失給て後ほどなく一条の宮へまゐり給ふ

大ぶとうとくまし給ふ人

冷泉院　母は　藤壺女院

東宮　母は弘徽殿女院

ものゝ御ぐしおろしまゐらせ給ふ

一宮　母は　ひがしの大臣女

生れ給ふ　竹河にまうで

女一宮　母　弘徽殿大臣女　一条にまゐ給ふ

女二宮　母　一条にまゐ給ふ

竹河にうつれ給ふ　一条にまゐ給ふ

一宮　母　朱雀院にまゐ給ふ

女二宮　一条のまゐ給ふ　若菜上に

廿二文
前武院
中納言院のいうさよの法師の院のれぐ
ようりてかうもん法廿三文とる

●先帝

式乃宮
そうめい寺殿とも申しさ廿よ式乃
薄雲女院　御ぐしの四文なり
相童よ四人ゑ法師て殿ばかりて申ゑ和葉院よ廿文
人れそく廿御をこして法よ三法さうさにうさ
つもかうし法とよりうよ大上天皇よりせうもう

如法そうせなどうせ雲孔雀よりくれ法
源氏宮　廿八更衣
朱雀院長文の御時うゑ法て廿三文をう
ゑ法友童しまさ失法ふう廿三ようゑ

源中納言
友稽よ尼之法書梅枝よ小条院ちうさう
うせ法しくれ下よ中納言とうゑ
若太　朱雀院れ院の之ぐれ日皇麿まひしく

中将
侍従
民乃大輔

以上三人ていりうとの志なれの方墨をうれ所
又のもしうりじくへよ寄りしくへ

舞男大納言　母今の小方
なれよりとりて所うけしくへ

紫上　母按察大納言女
十ぢうの時源氏志じくとり沢放れしてよ
て車とゆうさしれ法よりうれ沢

冷泉院女御　母同じ舞男小方
母よ入内ニ寄りて中志しいて志うれ紫上
うりハいもうとくうも

常陸宮

阿闍梨　私日初音巻より醍醐の阿闍梨
源氏の八講よ寄りそうへさるいりくとのれもし
そあうさ後ううしくへ

蓬生巻　末摘花の巻より源氏の志よあひ蓬生巻
よひへうれ院よりつろひ沢ワさ分末ハ

○摂政太政大臣

摂政太政大臣
相ずがよ花大臣うて源氏志の加冠せしくへ心
きりし巻より政仕ニ寄りて太政大臣うて相
政一沢ワさ言の四月ようせ沢ワさ分末ハ

致仕太政大臣　母三十末
相ずがよ致人女ずるうしてよ頭中ずるの紅葉賀よ

正四位下次年に宰相中将とおはしまして権中納言になさせ

給ふ次に権大納言にて右近大将をかね女は内大臣后の

兼家に太政大臣の兼官下に致仕の表をたてまつり給ふ

うせ給へるよし匂宮の巻にみゆ。ひきさ付水(?)

左中弁

若菜に北山へ源氏わかれし人に参りし人なれ

末は中将弁みづから参りにてこゝにいつるもこの人

なるべし。夕霧巻の左大弁もこの人にや。

藤(トウ)大納言

春宮大夫(ダイブ)

此二人は源三条殿の父へまゐりし時致仕にかはると

ひきつれて参りつかうまつりし人なり。おもはれし君達と

ありし。若菜に左兵衛督権中納言とてあるもこの人どもの

ことしや。志らバ式部卿なりし左兵衛督なるべし

葵上

母大宮

あふひの巻に夕霧をうみおきてうせ給

柏木権大納言

母ハ二条太政大臣女四君

若菜に左近中将二十ほどにて右近中将兼次に頭中将

ゆきし上に宰相右衛門督同下に権中納言柏木巻

に数のかはれ権大納言になりて程なくかくらせ給

紅梅右大臣

母同上

さかきに童にてその人なりつゞけてうたひける高砂(?)

うちひしへ[illegible]より元服初言より弁おわりぬるより
以来おのれ下より左大弁殿より大納言にうつりし
時一条の文ども[illegible]とりしへ[illegible]冷泉院へ
参りしもしへうつくへ[illegible]和歌より按察大納言とて
侍従大納言より右大将にうつりぬ大将より加賀
といひて又権ぐわんより白文の初瀬まうでのれしの
へより参りし茂大納言やうりより東宮より
うつりて按察大納言といつつ不審

大夫　紅梅より童にて吉方文殊の[illegible]と名付し人

麗景殿女御　母故小弓

紅梅より吉方文へまつり給

中君　母かの[illegible]

左衛門督

常夏より茂侍従といつつはしへうや

茂宰相

[illegible]下より賀茂の祭[illegible]へさうへ[illegible]三人と名書
[illegible]より華山文西の初瀬より三条院へ
[illegible]より小条院より[illegible]冷泉院より[illegible]へ

頭中将

兵衛督

以二人物より名書[illegible]童殿上し給つる時おぼ
[illegible]へどもの度ごとに云り又名書一条の

文と西ひがしとさてさいくとれひいて次ら
長とこひうしとうくとの次さと上上世世
納言吉法師信長大臣と申しもいふこと
の時吉法師大臣といつるもいくうくし

八郎君

きく信と遠哥の時童とてゆうしく芳れ裏葉
れ行幸と賞王忍まひしもいたうくし

主鬚尚侍　母タうかの上

四のゝうしめれとしてて筑紫と下り幸ゐて
むうれ考と京へのゆう芳稿と内侍相考と
ひけゞゝのゆうとうり江

弘徽殿女御　母、同柏木

ふかくうと十二うて内へ参り江

夕霧大臣室　母桜葉大納言今れ小方

ゐ云ゆのうしとうらせうしく（ひさ分雲ゐ）

近江ゐ　母許もるく名案出しく

●二条大政大臣　ひき自右大臣

朱雀院れ母方祖父ゐうつ右大臣四男で政大臣て失江

芳大納言

頭弁　林と白虹日をけめけると頭せしく

麗景殿女御　朱雀院れ位の時れ女御稼ようゐ

四位女御　父かゞ芳のえくれ初り源氏れいしく

さうして花しうへての色みごとにぞ侍へしく

左中弁　はいこうくて原氏　ぶんの月夜の月ぞ

くて小の陣の車よくとつけてこそ侍しか弘徽

殿より出給へのはをうせしへどうう又御衣を

中将文のをけをどいくもけへくしや

弘徽殿大伯　ひきの弘徽殿又ハ西伯

朱雀院のれ母　養よ皇太后失給ひ給れ上よも

堂殿宮小方　花の文入れ来よう

殿仕大伯室　四君と中しさ

立ノ君　花の宮ようしうう

朧月夜尚侍　ひきの勝月　養よ朱雀よ彩てこうげ殿

と云ふ物ハ月ハ下よ花よりの方ハ大の花と云り

●左大臣

行幸より帰相よりうて左大臣はくしや

女御　冷泉院れ位のはれ御母相よう

●左大臣　御母よ左大臣はれもけへうへ

大弐ノ

修理大夫　はこ二人女御のひとつは版よいあべ

後童女御　今上ま文はけう系はしがはれ中

文よとうれ給さ　世二文くうとうとなうう也

う四ようようくうう又梅殿よ養京殿と

中ノ二ノ君はけへしや

・左大臣　竹殿と号せ

女　夕霧はおとゝの御よ宰相中将花人のなりと云

しけあひそあ御ひさ

・右大臣　今上の御祖父なり左大臣とも

竹舞殿太政大臣

こゝろよ右大将にかゝ上よりたよ物ぞ関下よ右大

臣として左大将と辞せ新帝の御らしろ云

太政大臣ともなりし竹河よりも引さ仏ひげ黒

頭中将

源氏の大将とゝ申しけ内侍につかひ出

し暁毎ゝ参ゝ申ゝ

朱雀院女御

朱雀院の女御今上の御母ゝ

なりるよし見れの下よりも

梅枝中納言　母ハ求子文女

梅枝よ中ゝ参りて殿上ゝ侍とゝ竹河正月よ

紫母内侍とゝ海うゝ参りし人寄せ夜寄日侍とも

次郎君　母なし

梅枝よ八ゝ参りて母のゝこよりゝ参ゝ文の侍

しゝ人ゝ参ゝ侍ら昇進ゝ参ゝ

右兵衛督　母西ゝ

宮ゝ下よ女楽の時ゝ参れ笛吹侍ゝ又朱雀院ハ

笑の日陵王まいし人竹河よ左近中将とも同

巻ノ上右京大夫殿ノ歌ヲ恋歌ニ入レラルベキヨシ
被宣旨ニ入レラルベキヨシ

右大弁　母かの

けさ二人ものうれたる朱雀院ノ御ぐしを
てをりて給ひ又朱雀院ノ御ぐしをおろ
曽ノ上ノ御ぐしをおろ　行幸ノ日ノ同巻ノ上ノ大弁

頭中将　母かの

行幸ノ侍従ノ同巻ノ上ノ中将

真木柱ノ上　母中納言ノ

ものの上ノ宣旨ノ内ノ文ノ上ノ
弘徽殿大臣　桜宴ノ大納言ノ

まうさせらるゝ祝ノ上ノ別ノ
女御　母ノ

行幸ノ四月ノ次ノ泉院ノ宴ノ事ノ
内ノ宴ノ女ノ

尚侍　母ノ女御ノ

行幸ノ母ノ

●大臣

六条ノ御息所　十六ノ前坊ノ秋好中宮ノ
十九ノ東宮ノ
御ノ

●大臣　女御

宇治ノ八宮ノ

・大宮　いま二人うまをきうしなひて悲しび給ふ

宮内卿少方　うれしもこそ

常陸の少方　ひさかたの母

宮内卿の少方めいがて、八中納言の文をひきかけ少方

せ給て悦び給ふ、文をはり悦よ常陸よりてゐだ給ふ

・大宮

入道播磨寺　近衛中納言うらうが辞して播磨ちよりうれしてうらうしうらうと云ゆ

明石上　母中務親王のしまゐ

か上一ようれ浦をうりて海山よ入ぬ

秋風ようの浦をとうれて大井よ住しゐ母

よい条院よりてうりて先れうこと少有

・梅宮大納言

雲林院律師

源氏ものがたり法文などよりもなほ人ものの様に有

桐壺更衣

源氏ものがたりをうこ沈て三とせよ死去うぎりとて

まうでる時輦車（テンガイ）のうち有意外よ物を乗三位をてゐる

・梅宮大納言　紫上一ノ母

・梅宮大納言　五節君　母よ乗物よりて

てやうてさうしいさかだのしゐあとを

・大将　東宮よ故大納言

尼近せ将　ひとりれ外がしこ

権中納言　右衛門督とはかりし人也

左衛門佐　源氏中河のやどりの時小君といひしもの

男ぐしてひたちへくだり関屋よのぼりて空蝉の君の弟也

空蝉君

父中納言にて後伊予介が妻となる父ひたちのかみ

てくだりけれどてくだり関屋よ京へのぼりて尼と

よみけるとられて尼となりて二条院東院に住き

右衛門督 — 女　母は小野右中納言なる人の北方

うせけるよし手習にある也

参議宮内卿 — 明石乳母　母は院宣旨

源氏よりひとりそて明石へくだして松風に姫君ぐして都へのぼる

三位中将

夕顔上

此花の名をかねとめしにかよひて玉鬘（カヅラ）を

うみそのゝち夕がほの宿にて源氏にあひなにが

しの院にとりやられてもの（け）につれてうせぬ年十九

宰相 — 宰相君　玉鬘の君の女房六条院に住わし

此人こそ通しる紀しる人備前に筑紫によるみけししさき人や

参議藤原惟光　母は大貳乳母　初は民部大輔と

右母は津守にて左京大夫になりけり梅枝に宰相

兵衛尉　童にて殿上をゆるされ妹の五節に夕霧の

父にかくし紀しれつひなりし梅枝に兵衛尉みざいは

ようつまれしかきぬかりて気ろうし人

茂典侍　久節　舞姫　夕書の三人ゆかりの侍従と
山阿闍梨　惟光がわかとなどかよこしうり
女房　命婦　などかの类さようの
三河守　書　などかよ大武のわまれかやうはりさ

・前播磨守
源良清　玄蕃よ義人てうりの所りよ女納言
ところのこはりよ　勘負佐　よせよ在中弁て近江
久節　女よ四よりしよどてさふくよりう

・尼中弁
宮仕の文化方母うこれとどといて
弁尼　母ハ伯耆のめれと
女三文の侍従のめれとちい芸大ゆる首のとト

さうをしく人さ四人うよりさらばこう

・伊予介
ちうハ伊予よりう常陸よ加て実屋よりう同考で長
紀伊守　源氏れ方こ人の中河の家ゆるで実屋よ河内
よりうあどもけうとちくれよこうゆうり
義介加近侍遊　源氏大ゆて紅院のれ縁よけうまつて
れしれ一郎ちうしく人うり源内大将よをもしさ
れしれり殿上のれふぐれうてのがりてかげい
のどうよりう相風ようりれうりうけうこさ
義人女房書　彩信の萩うり
うつ蝉の去れまくしせ源うつせこのもかけの夜

のひ給て彩陽の萩をしをれて後てつゝしる人

●常陸介　かとゝいふらの宮たゝ俊よりのちよなり

義人式部大輔　母まゝ人のつま

左衛門督近衛殿　母いま小の方

業大納言　母かの

童　母かの

手習の君小納言よりて業の父納言つゝれし人

源少納言妻　母まゝ人のつま

讃岐守妻　母かの

少納言小方　母今の小方

●大宰大貳

源次郎よりまさしひとりのぼりて

かしづれ給ふ人

筑前守　父の代ひよ内ゝ人ゝ

五節

源のあひ〻ひとり人ゝ父よりて内ゝ北方

よりぐる又男君ゝ母北方ゝも言ばれ給つゝ

●太宰少貳　多かりとれのかとこ

豊後介

父うせて後母君とゝもに京院へ

つゝ沙汰しけるそのゝち家司よくゝゝとき

次郎

三郎　はゝ二人ゝゝ出てゝまゐりけて京へものがたり

揚名の妻　なぐかの巻ようの

姫　こゝもとゝ出てゝよ出てのがたり

姫もと

●巻ノ大納言

もゝ人ごとゝいふ

太納言の妻　母ハ左衛門の乳母

情つゝしの巻ようあれと原よりさうをゝ人